

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主席
研究員



17 都市の景観を
考える

ご承知のように、池田満寿夫美術館は小布施町の栗菓子のお舗である一企業が維持してきた美術館である。

今回の同美術館の閉鎖は、あらためて、芸術作品の適切な収蔵・維持、そして展示コストに莫大な経費を要する美術館を一企業が担う厳しさ、難しさを痛感した出来事である。

一方、筆者が危惧するのは美術館や博物館など文化・芸術の殿堂が本来の立ち位置に固執するあまり、時代やニーズの変化に対応し切れていないのではないかとことだ。

現代の文化・芸術の殿堂は、人々がそこに身を置くことで豊かな

感性を磨くとともに、ユーフォリア(多幸感)を感じようとする本来の目的とは別に、ブランドイングツールとしての役割、そして極めて経済効果の大きい観光資源としての役割を併せ持つ、これが現実の姿である。

長野市を含む地方都市にあっては、本来の立ち位置に固執するあまり、利用する側との乖離(かいり)がまだまだ大きいのではないかと筆者は感じるのだ。

「モノからコトへ」へ意識が変わりつつある今、商品やサービスから享受される「体験」を重視する傾向を、主催・運用する側も意識した開催・展示も昨今多くなりつつある。

例えば、先頃まで上野の森美術館で開催された中野京子氏の著書にもとづく「怖い絵」展。実に、入場するまで最長210分待ちという人気ぶりであった。その人気は、来場者の好奇心や恐怖心をそるさまざまな仕掛けづくりにあったようだ。

来場者の約半分がオーディオガイドを利用して巡る展示物は、その一つひとつに視覚と聴覚に訴えるナレーションをふんだんに盛り

込み、おどろおどろしい世界に来場者が引き込まれていくといった工夫が凝らされていた。

また、国立新美術館で開催された「草間彌生、わが永遠の魂」展も見事でスペクトルな視覚効果に加え、来場した子どもや大人が白いボードに想い想いのシールを貼り作品を完成させる参加型パフォーマンスを構成し、わくわくするような仕掛けの連続であった。

大阪市のあべのハルカス美術館での「北斎」展も同館の最多入場記録を塗り替えるほどの大盛況。これらの前後に開催された京都国立博物館主催の「国宝」展、東京国立博物館主催の「運慶」展は、ともに10日余りの期間中の来場者数が50万〜60万人の芸術展だった。

(続く)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき)1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長